
IS～インフィニット・ストラトス～死神の黒兎

曾良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS（インフィニット・ストラトス）死神の黒兎

【Nコード】

N5402Z

【作者名】

曾良

【あらすじ】

死神の名を持つ少年、赤神玄兎。ある事件の際に、ちょっとした興味本位でISを起動させてしまい、IS学園に入学させられてしまう。学校なんぞ行ったことが無い玄兎はIS学園でハチャメチャで……？

プロローグ（前書き）

思い付きで描いた作品です。最後まで読んでくださったらうれしいです。

プロローグ

「くそ暑いな・・・ここ・・・」

真っ暗な部屋の中に一人の少年が退屈そうに天井を眺めていた。まわりはコンクリートできており、さらに外のからの風が入ってくるのは、子供がギリギリ通れそうなくらいの窓ただ一つ。さらに、真夏の⁸

月、コンクリートの熱気はものすごく、少年の体中から汗が噴き出している。

「もうちょっと、住やすくてできないもんかね・・・ここは・・・」

少年はそんな愚痴をこぼしなら、額の汗をぬぐう。ベっとりした汗に少年はすこし苦笑いする。

「ねーねー、風呂はいりたいー」

「風呂は2週間に1回だけだ」

少年は「けちっ」とだけ言うと、そっぽを向く。なんせ、この1週間お風呂に入っていない、自分が臭いの嫌だといい、駄々をこねているのだが、見向きもしてくれない大人たちに少年は心底がっかりしていた。

「は、早く冬にならねえかなー」

冬になれば待ちに待った、外にいけるのだ。少年はそれだけが楽しみでしようがない。なにせ、2年ぶりの外のなのだ、これが楽しみ

なわけがない。

「楽しみだな、なんせ2年も出てないからな」

外に出たら、やってみたいことはたくさんある。それを、頭の中で思い浮かべているだけで、時間はあつという間に過ぎていった。

「いいか、外にいられる時間は1週間、一応資金として10万を渡しておく、無駄使いするなよ」

「わかってるよ、子供じゃないんだから……」

「わかってると思うが、お前は今」

「わかってるよ、そのことはちゃんと心に刻んでおきますよ」

少年はそういうと、その場急いで離れる。早くこの場を去りたかったからだ。何年いてもあの男たちは好きになれないからだ。こつち

の意見は聞かず、まるでロボットのよう動くからだ。そのような男は少年

は好きでは無い。だからといっても、この場で何か事件を起こしては折角の機会を無駄にしてしまう。

だから、少年は大人しく今はこの男たちの言うことを聞いている。

男たちは少年を見送りという名の監視をしながら、少年を見ている。少年の走去っていく姿を見ながら、後ろに建っている施設に入っていく。

「さて……町に来たのは良いが……何をすればいいのか……」

少年はいきなり迷っていた。いや、迷ってなどはないだろう。元々どこに行くかも決めずに行動して少年にとって、道に迷うというのは違うのだ、そもそも少年はふらっときたらここに来た。それで、いいのだ、少年にとっては。

「どこだ……」

まわりはただの廃工場と廃ビルが佇んでいる、不気味な場所である。ここは、町とは全く別のところにあるのに来てしまったのは、ただ単に少年が某海賊の緑色の髪をした剣士ほど酷かった。

「誰か居そうだな……」

それは、完全に少年の勘だった。ここは町とは反対の方向にある廃工場だ、人などいるはずもなかった。

だが、少年はさっきまでの緩い顔ではなく、どこか敵を見つけたような顔つきで廃工場の中に入っていく。中に入るとそこは当時のままらしく、使われなくなった機械や材料などが山積みになっていた。

「これは……一体なんの施設だ？」

見たこともない機械、それはただの工場では扱っていないような代物だった。

「例……は……あ……か」

工場の奥から聞こえてきた声に少年はすぐに身構える。聞こえてきた声は常人なら聞き取れないほど遠くで行われていた会話で、少年はその声の方に近づく。近づくと段々と声がハッキリしてくる。

声からして、一人は女性で、もう一人は男性のようだ。

「例のものこれだ・・・」

男が女に何かを渡している、それは小さなもので少年がいる距離からは目視できなかった。男は施設にいた男で、女性の方は綺麗な金髪をしており、一般的に美人と言われる部類にはいるだろう。

「どうも・・・」

女はそれだけいうとこの場から立ち去ろうとする。それを男は慌てたように止める。

「おい、約束の金はどこだ？」

「なにそれ？そんなもの約束した覚えはないけど？」

「お前・・・われらを裏切るとはいい度胸だな！」

「裏切る？なんのこたかしら、私たちがいつあなたたちのお仲間になつたの？」

「貴様つ・・・!!」

男は悔しそうに胸から拳銃をだし、それを女に向ける。

「そんなもので、この私を殺せるとでも？」

「なに!？」

女はすごい速さの蹴りを男の顔面にかます、男はその勢いで銃を床に落としてしまう。女は床に落ちた銃を拾いその銃を感度は男に向

ける。

「くそ・・・貴様らただで済むと

」

「そいえば、言い忘れていたけどあなたのいたあの施設、今頃火の海でしょうね」

「亡国企業が・・・」

「じゃあね・・・」

バキュッンンン！

廃工場の中で銃声と薬莢が落ちる音が響き渡る。少年はそれを動揺ひとつせず、見ている。

しかし、少年は動かない。いや、動けない。今動いたら女のにばれる可能性があったからだ。迂闊に動けば殺されること間違いない、こちらには武器は無い。

(どうする・・・逃げるか？いや、下手に動けばこっちが・・・でも)

あんな状況を見て、無事に逃げられる保証もない。かと言ってもこのままじゃいつかはばれる。そんな少年の考えとは裏腹に女はこちらに気付く気配はまったくない。

だが

「そこに、いるのは分かっているのよ・・・出ていらっしやい」

女は少年の隠れてる方に銃を向ける。少年は観念したのか、両手を挙げた状態で出てきた。

「以外な人物ね・・・まあいいわ・・・どうせこの場で死ぬのだからね」

「けっ・・・どうだか・・・」

少年はこの状況に動揺ひとつせず立っている。死ぬかも知れない状況なのにその瞳には目の前にいる女を捉えていた。

「さすがは、《死神》と呼ばれただけはあるわね・・・この程度じゃ動揺しないか・・・」

「それはすまん・・・生憎俺はお前のような腰抜けではないのでな」

その言葉に女が一瞬だけだがピクリと反応した。

「随分強気な発言ね、自分の立場が分かってるのかしら？」

女は銃をこちらに向け、その指をトリガーに置き、引き金を引いた。

その瞬間だった。少年はその銃弾を躲し、女の懐に飛び込むと銃を女から奪い取る。

「くっ・・・いつの間・・・」

「すまんな・・・こちらとしては久しぶりの外なのに、1日目で死んじゃかなわんよ」

少年はそれをすぐさま解体し、遠くへ投げた。女は銃を取られたのにもかかわらず余裕の表情だ。

「今日のところはこれで見逃してあげる、私も暇じゃないの」

「どづいづこと」

「

少年が言葉を紡ぐより先に工場内にもすごい音とともにあるものが降ってきた。

「IS・・・」

「それは、元々その男が渡したものだけど・・・いらないから返すわ」

「お前」

「

少年の言葉を待たず、いつのまにか後ろにとんでいるへりに乗り込む。

「くそ・・・待て！」

女は少年の言葉を聞かずにそのまま少年を見ている。そして、そのまま飛び去っていった。

少年は何事もなかったように、その場に座った。少年は目の前に

映るISを見ている。

「ISか……使えたらあの女追えたのに……」

しかし、このISには少年には使えない。なぜなら、ISは女にしか反応しない。男である少年に使えるはずもないが、少年はなぜかISというもの触れたくなくなってしまった。ラファール・リヴァイヴ。これ

に触れたいという気持ちが心の底から湧きあがってくるのを少年は確かに感じてる。

「（触れたい！）」

だが、その時はちょっとした出来心でそれに触れた……。それが、少年の運命を左右することになるうとはこの少年は知らない。

その少年の名は赤神玄兎あかがみくろとまたの名を《死神の黒兎くろみみうし》

プロローグ（後書き）

この作品はちょいちょい更新していいのかなと思います。

感想や誤字脱字などがありましたらいつでも受付中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5402z/>

IS～インフィニット・ストラトス～死神の黒兎

2011年12月18日04時48分発行